

| | |
|------------------|---|
| Title | クレムリンの見える風景 (1) |
| Author(s) | 飯島, 康夫 |
| Citation | 聖学院大学論叢,19(2) : 39-47 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=53 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

クレムリンの見える風景 (1)

— 死者への郷愁と復活の空間 —

飯島康夫

The Landscape of Kremfins:

Nostalgia “topophilia” for the Dead and Space for Resurrection

Yasuo IJIMA

This article intends to explore what is behind the historical geographical expansion of Russia. Through examining the meaning of kremlins and fortresses for eastern Slavs, the metaphysics of homeland (“*Otchestvo*”) and what it means to make one’s place by forming a rhythm in one’s daily life and the practice of particular life styles. This examination entails introducing ideas of the Russian philosopher of cosmism, Nikolai Fyodorov (1828-1903) and demands rigorous efforts in the continuous search for answers.

Key words: Kremlin, Geographical Expansion, Homeland Search (*Otchestvovedeniia* ; отечествоведение), Nikolai Fyodorov

はじめに

大陸的なロシア人・スラヴ人の空間の捉え方は独特である。特にロシアの東進とクレムリ（正確にはロシア語読みでクレムリという。通常、日本語ではクレムリン。城寨の意味）の建設には、密接な関係があるように思われる。このことに気づかされたのは、もう随分、前のことである。筆者が高校生か、大学に入学して間もない頃であったかもしれない。東北アジア、ユーラシアに関心を寄せていた作家、司馬遼太郎の本、『ロシアについて—北方の原形』という随筆を通してであった。¹ロシアのコザックがシベリア・極東へ東進する際に、ほぼ「本能的」というほどまで、砦という軍事機能と教会という祭祀・宗教機能を併せ持つクレムリをその進出経路に築いてきた。これは、一体、なぜなのかという問いが心の中に湧き起こり、以来、ずっと、ロシア・ユーラシアの歴史地理の関心として私の心をとらえてはなさなかったのである。ユーラシアの地理的空間は、ロシアの歴

史と不可分だからであろう。近年、ロシアの地理学者、D. ザミャーチンがロシアを「空間を支配する帝国」と呼んで、ロシアの地理的膨張の歴史を、文学や宗教哲学・思想など、様々な角度から分析しようとしているが、あまりに難解な形而上学的なアプローチに偏重しすぎており、必ずしも、成功していない。²

見渡す限り、視線を遮るもののない大地は、人間に行動の自由を与えると同時に、精神的な中心を欠くために、人間を不安にさせる。城寨とは外敵の襲来から自らの身の安全を守る砦であるだけでなく、遠方からでも容易に教会の尖頭が見えるランド・マーク、つまり、無限に広がるかのようにみえる空間の中で、人々の心の支えとなったのである。遊牧民族など、外敵の侵入から身を守り、備蓄した食糧を置き、生存を確保し、心身ともにやすらぐことのできる場所、それが城寨（クレムリ）である。おそらく、ここには、無限定で、不安をおこさせる世界の中で生存を確保する為の、憩いと安らぎの居場所があり、そこは人間が無限の空間と対峙せざるをえないところでもある。人間は果てしのない空間に投げ出されると、自分のからだの立ち位置を確認して、この世界はこのようなものであるという、世界観を持たずにはいられない。住居や集落の形成は、彼の世界観を地上に投影したものとなる。無限に広がる空間の中で、自らが立つところを基点に、家屋を建て集落を形づくり、無機質、無差別の空間を意味ある場所に変え、混沌を秩序に変えていく。つまり、ここでは、大地に直立する人間の生、そしてその存在を確立せしめるものとしての場所の意味が問われる。その、空間を人間の住む場所に変え、無限定のものを秩序づけるものとは一体、何であったろうか。ロシアの場合、それはおそらく、クレムリ（城寨）であったとみられる。広大な原野、厳しい自然の中で、人間の生存を心身共に確かなものとしてきたのがこのクレムリであった。

空間を秩序づけ、それを意味ある場所に変えるのは、人間の生活のリズムと態度である。人間は徐々に、しかも、一見、日々の取るに足りないような小さな営みや所作、生活のリズムを通じて、空間を意味ある場所に転換する。これは、まるで、家庭の主婦がひとつ、ひとつ糸を通して、編み目を紡いで、タペストリーのような刺繍をかたちづくるかのように、人間が、日常生活の中で、中心部と郊外を何度も往来し、あるいは、彼女または彼特有の、生活リズムと習慣によって、朝から晩、晩から朝へと繰り返す地表面の一部に、自らの生の痕跡を刻みつけることなのである。それは、このようにして、浮き彫りにされる場所の意味、雰囲気やイメージのようなもの、日々の往来によって特徴づけられる、大地の小片の彩りのようなものである。³

ユーラシア大陸に広がる悠久の大地においては、農耕民族であるスラヴ人と略奪を繰り返すアジア系遊放民族の間で、たえず戦いの歴史が展開されてきた。ここに住む人間のリズムと態度は、当然、西ヨーロッパの人達のそれとは異なる。したがって、ユーラシアのロシア人・ウクライナ人を中心とするスラヴ人の生活のリズムと態度は、ある種、固有のものとして想定しなければならない。このため、歳入歳出の複式簿記を考案して、日常の生業を予測可能なものとしてきた商人達の「世俗内禁欲」と勤労革命、生活の合理化、経済・社会の発展という、いわゆるブルジョワ層の台頭と

都市文化の勃興というウェーバー流の西欧型社会の理解の仕方ではなく、遊牧民族との抗争の中で、頻繁に繰り返される防御と襲撃のうち戦利品として略奪品が蓄積され、富裕な支配者のグループが形成されてきたとみるロシア・ユーラシア独特の生活リズムと態度を考えることができるかもしれない。つまり、武勇と略奪がユーラシアの空間で人間の生活のリズムを刻み、支配者と従者という縦の社会の仕組みを築き上げてきたとみられる。ここでは、体系的で組織化された産業社会ではなく、予測の許さぬ敵の襲撃に抗い、民族抗争と取奪がロシア・ユーラシアの空間の生活のリズムの基調を奏でてきたとみられる。このような古代的な特質を依然と保持する社会においては、略奪品と富の蓄積は、武勇や名声、支配の根拠を形成するのに役立ってきた。このような社会では、平俗で凡庸な勤労は評価されず、かえってそれらは、農奴や身分の卑しい者のすることとみなされてきたのである。質素儉約ではなく、妬みを起こさせるような絢爛豪華な奢侈、つまり、「顕示的な消費」が好まれるわけである。一定の予測可能な見通しのもとに、勤勉に立ち働くのではなく、どちらかといえば、冥想や閃き、直観のもとに、冒険心に富むコサックと商人らがクロテンの毛皮を追って新天地を求め、不規則な狩猟生活のリズムを基調に、いつ来るとも限らない遊牧民族の来襲や抗争、先住民族、原住民との接触をくり返してきた。⁴ 広大なユーラシアの中で展開するロシア人の行動様式は戦争が生活を規定し経済や社会を形成するとともに、一握りの特権階級である皇帝・貴族の宮廷や館では、うわべの、洗練された西欧流のファッションが流行り、その憧れから彼らの間で奢侈と趣味の良さを競い合った。⁵ 支配者と富者の見栄による奢侈が商業を活発にし、多くの手工業者や商人を養い困窮者の収入を増大させ救済することになるからである。おそらく、パリやサント・ペテルブルクの女官達が、毛皮のファッションに狂奔することがなければ、ロシアの東進と要塞建設もなかったであろう。⁶

この小論は、軍事・防衛機能と宗教的な機能を持つクレムリ（城塞）がロシアやスラヴ人の集落形成に大きな役割を持っていることに注目し、十九世紀末の宗教哲学者ニコライ・フョードロフの地理的空間論を中心に、既に触れた、次のような三つの問いに対して、これらに答えるべく、できるだけ、接近しようというのが、そのねらいである。ロシア革命前、小中学校では、児童が郷土誌研究・祖国研究（отечествоведение）といって、広く言えば、社会科の一環として、ロシア・東スラヴを中心に民族の歴史・地理・自然環境や生態、人びとの生業や経済活動、経済など、祖国とよばれる場所がいかにして、形成されてきたのかという、いわゆる、地誌を学んだのである。この郷土誌研究は、ロシア帝国のロシア・東スラヴ民族の歴史地理的な概念形成やユーラシアという空間に対する彼らの捉え方を知るうえで、非常に参考になると思われる。さて、先の、三つの問いとは、次のようなものである。

第一には、ロシア人が東進・膨張の過程で、ほぼ「本能的」といえるほどまで、クレムリを築い

てきたのはなぜか。

第二に、日々の労働や闘いから退却、待避し、睡眠や食事、生殖や養育の場となり、子供達が遊び、育まれ、安らぎ、憩うという、人間存在の基礎をなす場所とはどのようなものなのか。また、無限定で混沌とした空間を秩序づけ有意味の場所へ転換するとはどのようなことなのであろうか。

第三に、もし、ごく日常の生活への態度とそのリズムがそこに住まう者にとって意味ある場所を形づくるとすれば、それは一体、どのようなことを意味しているのか。

このように言うと、読者達はこれらの問いはあまりに抽象的すぎるように聞こえるかもしれない。しかし、ロシア・ユーラシアの歴史が形づくってきた地理的空間を理解するうえで、それらは非常に重要である。人間が大地の上に直立し、天空と大地の接する、遠くの、地平線を見る存在であるならば、一定の空間に身を寄せ、根づくことを通して、人間存在にとって、住まうこと、イエを築くこと、場所とは何であるかを探求するという意味での問いかけは避けられない。実に、人は家を築くことによって、世界に自分の場所を築くのである。そういう意味で、それは人々によって歴史的に形成されてきた「生きられた」地理的空間への形而上的なものへの探求ともいえる。しかしながら、何分、課題が大きいので、本論は、あくまでも、これら三つの問いに対し答える為の、一連の、探求への旅路における最初の一步、ごくささやかで初歩的なものとしてご理解していただきければ、幸いである。また、これらに対して、一応の答えを出すには、時間と紙幅の関係など、筆者の余裕も含めて、限られているために、今回の本論文を取っ掛かりに、この学部論叢誌に連載する続きものとして書かざるをえないことをどうか、お許し願いたい。したがって、表題と既述の問いに対する、最初の部分としたい。

1. 城寨 (クレムリ) の建設

さて、前述の司馬遼太郎の随筆には次のように、こう記されてあった。

「城寨」というのは、堀をめぐらし、柵を植えこみ、そのなかに指揮者、武装者、商人、農民、工人などが住み、倉庫、火薬庫などを設ける形式のもので、十二世紀ごろのモスクワというクレムリ (城寨) も (火薬庫はなかったが) そういうものであった。全員が騎馬軍であるシビル汗国に対抗するには、いきなり野戦をするよりまず城寨を設けるほうが利口であった。織田信長もまた長篠において長大な野戦築城 (馬防柵) を施した。ロシア側としては攻撃してくる騎馬軍に対し火器をもって酬い、ときに相手の虚を衝き、敵が弱ればさらに前進して城寨をつくり、領域をひろげる。(中略) (帝政ロシアの仕組みは) キプチャク汗国時代と同様、貴族と農奴という単純な二元構造でできあがっていた。…(農奴は) 裁判権をもつ領主から生殺をふくめた刑をうける存在で、移動や移籍の自由もなかった。コザックは、そこから (ときに都市からも) 逃亡して辺境に住んだ人達で、定義は、…自由な人という意味を持っている。領主のむちと搾取から自由になった、という意味の自由だが、べつに、ロシア体制からのがれ出た冒険的な生活者という定義も考えられ

るだろう。かれらは、例外をのぞいて農耕せず、辺境の農村に寄生したという点で、遊牧民族に似ていた。ただ、遊牧民族の襲撃と掠奪にたえずおびやかされている辺境の農村を私的武力で守ってやるという点ではちがっていた。…かれらとアジア系遊牧民族…とのちがいははっきりしている。まずかれらはさほどに牧畜的資産をもたないこと、本能のように城寨をつくること、それに魚が大好きだということである。…冒険的なコザックを中心とする任意の征服者たちが、あらそってシベリア征服に乗り出し、城寨をつくり、原住民を抑圧し、黒貂をとりあげ、それを買うべく商人たちが奥地に入った。さらにはモスクワの方針によって開拓農民も進出した(五七~八頁。六一~二頁。七一頁)。⁷

著名な建設技師 V. ヤコヴレフは、『要塞の歴史』の中で、砦建設の歴史は、人類が自然や敵の攻撃に対し防御のため、柵を張りめぐらせ囲い、その中に住まうというかたちで、おおよそ、人間が共同体をつくり、それらを守るための戦いの歴史とともに歩んできたと述べている。太古の人達は身の安全を洞窟などに住まい確保した。複数の家族が一定のところに住みつくようになると住居を外敵の襲撃に備え、護りを強固にしなければならない。こうして、いくつかの家族が一定の場所に住むようになると、集落の防御の必要性が生じるようになった。その後、複数の集落が街を形成し、一定の場所に幾世代にわたり、諸々の民が集うことにより、政治的な統合と組織をつくり、やがて国をかたちづくっていった、という。⁸

住居を外敵から守る最古の形態は、もちちん、寒さや天候、そして、野獣の襲撃など厳しい自然に対して、身を寄せることができた洞窟であった。あるいは、人が容易に踏み込むことができないような深い森林の中に木で住いを構え、地中には侵入者を入れさせないよう防柵を埋め込むような形態をとった。また、島のようなところに住居をつくり、身の安全を図った。いずれにせよ、一定の人達が集まり、いくつかの家族が集まり住むようになって、厳しい自然や外敵の来襲に対して住居の防御を強化するという最初の形態が生じた。最初は、河や沼、湖などの水、断崖絶壁などの切り立った岩壁や山など、自然の地形や要素を利用した天然の要害を築いた。次に、厳しい自然環境からというよりも、人間同士の争い、敵対状態が悪化して他の人間から身を守るという、人的な要素がより濃厚になると、地の利だけで安全の確保がままらなくなり、人為的な要害をつくり、身を護る方法を考え出さざるをえなくなっていく。これが後に砦の建設や要塞建設といった軍事的な土木技術の発展につながっていたという。地中に杭を埋め棘の付いた枯枝をこれに巻きつけ、バリケードのような障害物を置き、土塁を築き上げる。こうして、人間が他の人間の侵入に対してこれを防ぐ工夫を凝らし、人為的に造った防柵の中の住まいという形態を登場させるに至る。⁹ 土塁や木材、石などを使って、堀や壁を築きその上には敵襲を見張る櫓を幾つもつくり、外周に堀を巡らし、環濠の集落・街を形成していくのである。城壁はやがて、より分厚く堅固で、高く築くようになり、侵入者に対し、石落としの穴や燃え滾る油を浴びせる仕掛け、さらに矢を射るための通し矢の穴など、様々な工夫がほどこされるようになっていった。城壁の形も、考えられうる敵の侵入

方向に対し、死角をつくらぬよう、多角形のものへと変化していったようである。非常に簡単で原始的な洞窟や防柵から始まり、防柵と環濠の集落から城壁のある都市国家、さらに国家へと発展していき、人間の生存を確保する為の防御施設と歴史が密接に結びついていることを、私たちは知るのである。ここに城寨の原型の完成と国の起こりを見るのである。このような城寨はギリシャの都市国家やローマ帝国のなかに、既にあったという。¹⁰

例えば、ローマ帝国時代、皇帝クラウディウス（紀元後41~45年）の時にオスティ湾に強固な城壁を築き、アウレリウスの世（紀元後270~275年）になって、1400ヘクタールにわたって、ローマの街を新しい城壁で張りめぐらせ、ローマの要塞化が少しずつ進んでいった。ローマを中心に軍用道路網がつけられ、属州や植民地への部隊展開を容易にしようとした。また、現在の北アフリカ、チュニジアにあたる場所に古代ギリシャの要塞都市、カルタゴがあった。ここは、通商活動、特に海上交易が盛んであったこともあって、海港型の要塞の街であった。軍港には220もの大型船を収容することができ、人口は70万人を数えるほどの繁栄ぶりであった、といわれる。古代ギリシャの他の要塞街としては、もちろん、紀元前7世紀半ばのビザンチオン（紀元後330年の、コンスタンティヌス帝の遷都では、後のコンスタンティノーブル）がよく知られている。マルマラ海、ボスポラス海峡、金角湾の間に囲まれ、三方を海が、一方を陸の城壁（ビュザス城壁）がこの街を守っている。敵が攻撃をしかけるのに困難で、味方が防御するのに容易な、古代岬型城砦の典型的な形をとっているという。¹¹

一般に、古代の国境防衛は、隣国の攻撃に対し連続した要塞線、つまり防御壁の建設であった。これは、アレクサンダー大王の東征の時（紀元前330年）にも、インドに差し掛かったところで防柵の連なる防壁に出会ったといわれている。アジアでは古代中国の万里の長城が有名である。その長さは五千キロメートルにも及び、厚さ四メートル、高さ約八メートルというものである。¹²

さて、ロシアの砦建設のはじまりは、どのようなものであったであろうか。九世紀半ば以前、スラヴ人の砦は非常に単純な土塁であった。防御の強固さは土で築く堡壘の高さと厚さにあった。砦の中には、高さ二十一メートル、奥行き十メートル半にも達するものもあった。十一世紀末、土塁は木造の砦に取って代わる。このような砦のおかれた場所はザチン（つまり、本来、人が心身の安全を確保する避難場所である『物陰』という意味）と呼ばれた。古代ロシアの砦の特徴は九世紀から十世紀に始まった木造の要塞にある。堡壘を非常に高くして、敵の侵入を食い止めるという必要性が生じたために、ザボル（『木の柵』という意味）と呼ばれる木造の囲いを建て、丸太を地中に深く埋め込んで組み合わせてつくった防柵で集落の外周、つまり、城砦となる部分の周りを囲んだ。十一世紀のことである。豊富にある森林材をふんだんに活用したわけである。城壁に付随する塔は、平時には住民の通行門、戦時には敵の来襲を見張り、仲間にそれを告知らせる鐘楼を持つ物見台という二つの役割を果たしていた。このような城壁の塔は、十六世紀以降、ロシア語でバーシュニャという言葉で言い表すようになった。形状は様々で、四角形のものから六角形のもの、二階か

ら三階建て、高さも六メートルから十三、五メートルのものまで様々である。¹³

十一世紀半ば以降、ロシアでは木造の砦づくりと並行して、石づくりの砦がみられるようになる。石造の砦としては1037年にヤロスラヴリ賢公によって建立されたキエフの要塞やノヴゴロドの城寨、モスクワのキタイ・ゴラトの城壁などがよく、知られている。これらの砦づくりには、天然の石や煉瓦などが使用された。城壁の高さはまちまちで、モスクワのクレムリは十五メートルにも達する。塹壕や濠の側面には石を敷くことはなく、塹壕と城壁の土台部分の間には通常、余白の帯状の土地を空けておくことが多く、二～十四メートルの距離をおいて造られる。敵が潜むことのできる死角をなくすため、城壁上の櫓を高くする場合には、塹壕や濠も、より遠く前方に掘る必要があるからである。側面から敵に突かれないようにするためには、上から城壁の形を見れば、櫓が半円または全円に近い状態で城壁の突起部分として少し前方に出ている方が望ましく、これも死角をつくらなため工夫である。モスクワのクレムリの場合、城壁の突起部分にあたる長い回廊の頭はネグリンナヤ川を越えて、前方に出ており、「ポリソグレプスキーの門」という名前で知られている。これはクレムリの内外を結ぶ橋が要塞化したものである。¹⁴

古代ロシアの年代記によれば、外敵から身を護るためにつくられた集落は各種の防御手段で軍事的に堅固な拠点となり、ゴラト（「街」の意味）、あるいは、オストロク（「城砦集落」の意味）と呼ばれていた。クレーパスチ（「要塞」という意味の、最も一般的な言葉）という用語が公式に、用いられるようになったのは、十七世紀以降である。V. ヤコヴレフの調べでは、私たちがごく一般に使う街、ロシア語ではゴラトという言葉は、密接に砦や城、要塞といった、軍事的な防御地点を表わすものと深く結びついているという。モスクワという街の起こりも、クレムリ（城寨）に由来しており、キタイ・ゴラトやペーリイ・ゴラト、ゼムリャンヌイ・ゴラトという複数の防御地点、つまり、砦が集まったもので構成されている。この他、正教の街、プスコフも、そのクレムリで知られているが、ここもスレドヌイ、ゴラド、バリショイ・ゴラト、ザプスコビーアという砦の集合体である。なお、防御地点には様々な名前が付けられている。防柵や囲い、塹はオグラダ（града）というが、この言葉には軍事的な意味とは別に、庇護、保護する者という意味や、教会の境内、墓地の区画など、宗教的な意味、そして、慰霊の場所などの意味を持っていた（和久利誓一ら編、『岩波ロシア語辞典より』）。さて、この集落の囲いの外にある防柵や砦のことをオコーリニイ・ゴラト（окольный город；隣の街という意味）と呼び、囲いの内側にある砦を街の中心にある城砦として、古代ロシアではデチーネッツ（都市中央の城寨）、あるいは、同じものを十四世紀からはクレムリ（城寨とも書く）と呼んだようである（前掲『岩波ロシア語辞典』）。さらに別の資料で調べてみると、デチーネッツやクレムリは、古代から中世にかけて「都市の中心部に位置する城寨」であって、「多くは川や湖に面する丘の上に存する」ものである。ここは古来、「聖俗」両権力の所在地を示すものであった。こうした街の中心的な砦である、クレムリ（以下、クレムリの邦訳を城寨と書く）中には、既述のプスコフやノヴゴロドの他に、カザンやアストラハ

ン、コロムナなどがある(川端香男里ら編『新版 ロシアを知る事典』より)。確かに、筆者がニコライ・フョードロフなど、宗教哲学研究の第一人者の一人、ガーチェヴァ先生と一縮にモスクワのクレムリの中にある寺院内を見学していた時に、皇帝と総主教の座る場所が並ぶように置かれていたことを思い出す。クレムリが聖俗両権力を象徴するものであることを改めて思いおこさせられたのである。さて、このデェチーネッツ、あるいはクレムリとは、街を脅かす敵襲から住民を覆い隠すところ、「девать」と「деть」(「隠す」を意味する動詞の不完了体と完了体)、「укрыть」(「覆う、かくまう、防護する」を意味する動詞の不完了体)という言葉と切り離すことができない。クレムリはロシア語でкремльと書くが、語源としてはタタールの言葉で要塞や砦を意味したものがロシア語に外来語として入ってきたものである。デェチーネッツ、クレムリは、城の最後の守りとなる部分、日本の城でいうと、本丸や天守閣にあたる部分である。ロシア都市の内側には、敵襲にそなえて近隣の人達が城壁内で逃げ入ることができるように十分な余裕をもって空地を用意していたという。そして、この空地とは、避難した人達がこの空いた土地に、兵糧の際、住居を建てるためのものであった。人間の生存にとって不可欠の、水の補給は、城内から近くの河岸に出ることができるよう、秘密の地下の抜け道が通常、設けられていた。この地下道の上に、城塔、櫓を築き、秘匿したという。モスクワのクレムリではタイニツカヤ塔が有名である。¹⁵

古来、ロシアの境界防衛には、敵対する民族の性質と来襲の方向が大きな影響を及ぼしたとみられる。ロシアの文化的中心を仮にモスクワ公国のあったモスクワと置いてみると、その中心からみて北西部には宿敵、ポーランドとリトアニアが位置していた。軍事防衛戦略上、この北西方面には、グドフ、プスコフ、ポルホフ、そして、スモレンスクなどに代表される城寨都市が配置されている。一方、東部方面にはタタールなど、アジア系遊牧民族と対峙しており砦を数珠つなぎにした軍事防衛上の、警戒線を張り巡らしていた。障害物の一切ない、東方の守りとなるステップ地帯では、塹壕と土塁で築いて防御線を敷いた。森林のあるところでは、うっそうと生い茂るところに防御陣地を築き、その土地の資材、つまり、棘やたくさんの出っ張りのある木々を利用して、木々を切り倒して侵入路をふさぐような、逆茂木をつくり、敵の攻撃を阻もうとした。これは原語でザセーチニイ・リーニア(засечные диния)、つまり、逆茂木または鹿砦(ろくさい)の防御線と呼ばれた。この防御線のかなり後方に、自分達の集落へと続く道を敷き、最重要の防衛拠点を彼らの都市、砦市として位置づけたようである。¹⁶ ロマノフ朝最初の皇帝、ミハイル・フョードロビチの時には、1633年にタタールの侵攻を受け、東南部国境の脆弱性を痛感した彼は、後に1635年、ベルゴロド防御線とよばれる一連の要塞都市群の建設に着手した。十五年で二九の城寨型都市がつくられ、ベルゴロド、ボロネジ、タンボフまでを通した。¹⁷ ヴォルガ河からチェレムシャン河、ベーラヤ河に至る地域一帯である。これら一帯には、土塁、逆茂木・鹿砦が設けられ、重要拠点には防柵と尖塔のある見張り櫓のある城寨を発祥とする集落、都市が築かれたのである。¹⁸

(次号へ続く。今回はキエフ・ルーシから、モンゴルの侵略を経て、モスクワ公国に至るまでの、歴史地理的な、城寨型都市空間の形成について、その詳細を述べ、ロシア・東スラヴの集落形成に伴う地理的空間の特徴について一応の結論づけをしたい。)

(ここまでで、取り扱った、主要な参考文献)

- ヴェルナー・ゾンバルト、『戦争と資本主義』(金森誠也訳)、論創社、1996、東京。
ヴェルナー・ゾンバルト、『恋愛と贅沢と資本主義』(金森誠也訳)、講談社、2000、東京を
ジュリアン・グラック、『ひとつの町のかたち』、書肆心水、東京、2004
ソースティン・ヴェブレン、『有閑階級の理論』(高哲男訳)、筑摩書房、1998、東京
デヴィッド・ウォーンズ、『ロシア皇帝歴代誌』(栗生沢猛夫監訳)、創元社、2001、大阪
西村三郎、『毛皮と人間の歴史』第五章及び第六章、紀伊国屋書店、2003、東京
橋口倫介、『中世のコンスタンティノーブル』、講談社学術文庫、1995、東京
Д. Н. Замятин, А. Н. Замятин. *Империя Пространства*. РОССПЭН. 2003. Москва.
В. В. Яковлев. *История Крепостей*. Издательство Аст. 2000. Москва.

注

- 1 司馬遼太郎、『ロシアについて—北方の原形』、文春文庫、1989、東京。
- 2 Д. Н. Замятин, А. Н. Замятин. *Империя Пространства*. РОССПЭН 2003. Москва.
- 3 ジュリアン・グラック、『ひとつの町のかたち』、書肆心水、東京、2004を参照。
- 4 ソースティン・ヴェブレン、『有閑階級の理論』(高哲男訳)、筑摩書房、1998、東京を参照。
- 5 ヴェルナー・ゾンバルト、『戦争と資本主義』(金森誠也訳)、論創社、1996、東京。同じく、ヴェルナー・ゾンバルト、『恋愛と贅沢と資本主義』(金森誠也訳)、講談社、2000、東京を参照のこと。
- 6 西村三郎、『毛皮と人間の歴史』第五章及び第六章、紀伊国屋書店、2003、東京。
- 7 前掲書。司馬遼太郎
- 8 В. В. Яковлев. *История Крепостей*. Издательство Аст. 2000. Москва. С. 9-10
- 9 Там же. С. 12-3
- 10 Там же. С. 14-6. 橋口倫介、『中世のコンスタンティノーブル』、講談社学術文庫、1995、東京、110頁を参照。
- 11 Там же. С. 16-7
- 12 Там же. С. 19
- 13 Там же. С. 22-3
- 14 Там же. С. 23-5
- 15 Там же. С. 25-6
- 16 Там же. С. 26-8
- 17 デヴィッド・ウォーンズ、『ロシア皇帝歴代誌』(栗生沢猛夫監訳)、創元社、2001、大阪、八三頁。
- 18 Яковлев. С. 28-9